

アラビア半島の変動帯

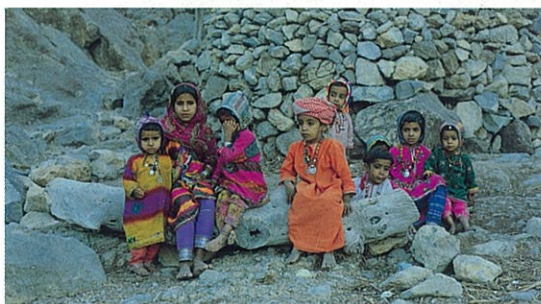
39 アフダル山脈 (オマーン)

アラビア半島中央部は、ルブ アル ハーリ（空白地帯の意）砂漠と呼ばれる広大な砂漠地帯が広がる（ただしオマーンでは砂地はほとんどなく、水がないだけの礫原が多いので礫漠といったほうが適切）。半島の西岸には、アフリカ大地溝帯と同じく、新生代第三紀以降に開き始めた紅海が広がっているが、この海岸方向（西）に向かって、アラビア楕状地を形成する古い安定地塊はきわめてなだらかに標高を上げて 3000 m 以上の山やまを連ねる山地となり、最後は比較的急傾斜で海岸に達する。半島南方のアデン湾でも同様である。一方、半島東部のオマーン湾岸には、対岸イランのザグロス山脈と同様に、中生代から新生代のアルプス造山運動による 3000 m 近い狭長な脊梁山脈が連なる。これらの山地では、南部を中心に夏の季節風が降雨をもたらし、緑豊かな風景となっている地もある。

現在のオマーンを中心とする地域は、BC 30 世紀ごろからマカンと呼ばれており、メソポタミアへの銅の供給および優秀な航海者の地として知られていた。銅精錬跡もあるが、精錬が行われてい



アフダル山脈を横断する谷の側面支谷。古い砦の背後は比高 2000 m の単斜構造の山。長岡正利撮影 81. 秋



山岳地域の小集落での子供たち。長岡正利撮影 81. 秋

たとすると、当時のこの地方にはレバノン杉のような巨樹が茂っていたのかもしれない。

時代は降って、10 世紀にはオマーンは全イスラムにおける最も繁栄をきわめた港として知られた。この時期、オマーンの海上勢力は全インド洋の交



アフダル山脈中の小盆地。長岡正利撮影 82. 秋

易を支配し、そのダウ船は中国の広東にまで達した。

1498年のバスコダガマによる喜望峯廻りのインド航路の発見にもオマーン人が水先案内の役割を果たしたと言われている。しかし、それ以降のポルトガルの侵攻、ヨーロッパ諸国による東西交易の発達、さらにスエズ運河経由による蒸気船の運行によって、オマーンは閉鎖的な経済状態となった。なお、1970年以降は、現国王による治政下で内政・外交における改革が進められ、石油収入もあいまって近代的な国づくりが進んでいる。

オマーンの気候は熱帯乾燥気候に属する。首都マスカットの冬は日本の晩夏程度だが、夏は最高気温が連日のように40度を超え、海に近いことから湿度も高く、日本人にとっては耐えがたい暑さとなる。年間降水量は100mm程度だが変動が激しく、年に数回はどこかで局地的な洪水被害が起きる。山岳地域では時には降雪もある。

オマーンを特徴づける地形は、北東側のオマーン湾沿いにゆるく湾曲してつらなる平野と、背後のアフダル山脈(またはオマーン山脈)、その内陸側に広がるルブアルハリー砂漠である。アフダル山脈の稜線部は、山脈を形成した背斜軸に一致しており、軸にそって鍋状の小盆地が点在する。

山脈中央部を構成するのは石灰岩を主とする古・中生層であり、見事な単斜構造をなしている。山脈の両側の広い地域は低い山地で、異地性のオフィオライト(かつて海洋性地殻を構成していた塩基性火成岩がプレート運動によって移動してきたもの)由来の礫が、強い陽射しに焼かれて鉄錆色の異様な色調となっている。

アフダル山脈の最高峰は標高2980mのジャバルシャムス(太陽の峰の意;下写真の左下縁)であるが、この国の人びとにとっては登山対象とはなっていない。山脈の北から近づくのは、鍋状の盆地の急崖をはいあがることになるので容易でない。南からは緩傾斜の斜面をたどることができる。ただし、古くからの山越えの道のほかは、そもそも登山道などない。

近代化が急速にすすむ首都近郊とは対比的に、山間部では過疎化がすすんでいるが、今だに古いアラブの伝統と生活が残されている。山深い集落を訪れれば誰であれ、腰に剣を佩(はい)した長老から客人として遇される。まず甘味な干ナツメヤシ(デーツ)、次いでカルダモンの香り豊かな濃いアラブ風コーヒー、そして場合によっては食事と、アラブホスピタリティといわれる古いアラブの美しい風習にふれることができる。(長岡正利)



ランドサット TM 画像で見たアフダル山脈東端部、
右上が首都マスカット。画像提供 財団法人 環境視測解析センター